

ひれ墓（加古川市大野）

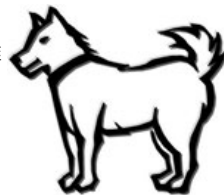
加古川下流の東西にひろがる平野は、古くから“印南国原（いなみくにばら）”と呼ばれていました。第十代崇神天皇（すじんてんのう）は、山陽地方を平定するため、吉備津彦命（きびつひこのみこと）を派遣されましたが、その一族、若建吉備津彦命（わかたけきびつひこのみこと）は加古川地方に居（きよ）を構え（かまえ）、大和（やまと）の文化を移しました。



やがて、この家に美しい女の子が生まれました。“この地方を治める家の娘”というので、印南別嬢（いなみのわきいらつめ）と呼ばれました。（のち、稲日大郎姫命（いなひのおおいらつめのみこと）と呼ばれます。）

大きくなるにつれて、その美しさとかしこさは、人びとの評判になり、とうとう、大和の宮居（みやい）まで伝わりました。第十二代景行（けいこう）天皇は、この嬢（いらつめ）を妃（ひ）に迎えたくなり、息長命（おきながのみこと）を仲人とし、装い（よそおい）、飾って（かざって）播磨（はりま）へたずねてこられました。嬢はこれを聞くとびっくりし、南毗都麻（なびつま）の島に渡り、姿をかくしました。

天皇の一行は、まもなく、加古川に近い加古の松原に着かれました。しかし、嬢（いらつめ）の姿が見えません。あちこち探しておられますと、一匹の白い犬が、海の方へ向かっていつまでも吠えて（ほえて）います。天皇は、「あれは、誰の犬か。」とたずねられました。供（とも）の者は、「嬢が飼っていた犬でございます。」と答えました。



天皇は、嬢が島にかくれたことをこのことから察せられました。そして、舟を出して島に渡り、嬢をつれ帰り、新宮を建てて結婚されました。九州の熊襲（くまそ）、東北の蝦夷（えぞ）を征伐（せいぼつ）して大きなたがらをたてられた日本武尊（やまとたけるのみこと）は、景行天皇とこの嬢との間に生れられたかたです。



その後、年を経て、嬢はこの宮でなくなりました。そこで、すでにつくられている日岡山の陵（みささぎ）に葬ろう（ほうむろう）と、舟に乗せ、印南川（いなみかわ）（現在の加古川）を渡っていると、突然、旋風（せんぷう）（つむじ風）が起って遺体（いたい）を川の中へまき入れてしまいました。人びとはびっくりし、あちこち手をつくして探しました。しかし、どうしても見つかりません。ただ、嬢の使っていた匣（くしげ）（くしなどを入れておく箱）と、身につけていた褶（ひれ）（長いうすい布）だけが得られました。日岡山は、加古川下流の平野を一望におさめる景勝の地ですが、嬢の身につけていられたものとしては、ただ、これだけが入れられ

ました。

この御陵（みささぎ）を「ひれ墓」というのは、こうしたことのためです。